

May 2016 subject reports

## Japanese A: literature

### Overall grade boundaries

#### Higher level

<b>Grade:</b>	1	2	3	4	5	6	7
<b>Mark range:</b>	0 - 17	18 - 32	33 - 46	47 - 58	59 - 72	73 - 83	84 - 100

#### Standard level

<b>Grade:</b>	1	2	3	4	5	6	7
<b>Mark range:</b>	0 - 16	17 - 30	31 - 42	43 - 55	56 - 68	69 - 80	81 - 100

### Higher level internal assessment

#### Component grade boundaries

<b>Grade:</b>	1	2	3	4	5	6	7
<b>Mark range:</b>	0 - 5	6 - 10	11 - 13	14 - 17	18 - 21	22 - 25	26 - 30

### 提出された成果物の特徴および適切さ

『「言語 A : 文学」指導の手引き』ならびに『DP 手順ハンドブック』など必要な資料はすべて OCC から入手できるため、教師は内部評価の実施手順を容易に理解することができるかと思えます。しかし、外部モデレーションの対象となる HL の内部評価は個人口述コメントリーおよびディスカッションの 2 部に分かれており、内容も異なるため、どのように指導するかは改善していく必要があります。

ほとんどの場合で抜粋と「考察を促す問い(ガイディングクエスチョン)」は適切にスキャンされていましたが、中には抜粋に「考察を促す問い」が記載されていないこともありました。

提出されたサンプルの質は全体的によかったです。生徒と教師の声はよく録音されており、教師が録音環境や機材に注意していることが判ります。ただ、中には電話の鳴る音、授業の開始を告げるベルなどが録音されているものもありましたので、次回からは注意するようにしてください。

全ての作品は **PLA** から選択され、個人口述コメントリーとディスカッションはジャンルの異なる作品が選択されていました。これらの作品は文体に特徴があり、内容も分析にふさわしいものでした。詩の論評に適した作品とは、作者の選択（言語、構成、技法、文体）に特徴が見られるものです。なお、**PLA** から選択された著者は、萩原朔太郎、石垣りん、茨木のり子、宮澤賢治、三好達治、中原中也、谷川俊太郎、高村光太郎などでした。

**1/IARF** のコメントは生徒の成果への判断が的確に示されており、教師が録音後に聞き直しをしていることが解ります。

教師の多くは生徒の個人口述コメントリーが終了した後に質疑をしていました。しかしコメントリーが **10** 分を越えた場合は、その箇所について試験官は評価しませんので注意が必要です。

「考察を促す問い」の質と数はほぼ適切でしたが、その主な目的は生徒が論評を組み立てる際の出発点になることです。**HL** の「考察を促す問い」については『「言語 A : 指導の手引き」』の **79** ページを参考にしてください。

個人口述コメントリーの詩の長さは **20~30** 行が推奨されています。長すぎると詳細に論評するのが難しく、質疑応答にも支障をきたします。また、短すぎる(和歌、俳句、短歌)と力の足りない生徒にはやはり論評が難しいようでした。なお、抜粋には「試験問題 1(ペーパー1)」のように、行に番号を振るとよいでしょう。

コメントリー終了後、録音を止めず直ちにディスカッションに入りますが、生徒が事前にどの作品が取り上げられるかを知ることが許可されていません。そこでディスカッションで使用する作品はカードに題名を記し、生徒にランダムに選ばせるなどの工夫をしてください。

ディスカッションは、インタビューやプレゼンテーションではありません。課題を実施する前に設問を用意することは認められていますが、予定した流れに固執すべきではありません。自然なアプローチ、つまり生徒の返答に応える形で問いかけがなされる方が到達点は高いと言えます。生徒が一人で話すのはプレゼンテーションに近く、ディスカッションで求められているものではありません。

教師の多くが文学的議論を前提にディスカッションを進めており、生徒は独自の理解を示すことができていました。**HL** のディスカッションでの問いかけの例については『「言語 A : 指導の手引き」』の **80~81** ページを参照してください。

## 評価規準に基づく受験者の到達度

### 規準 A

生徒の多くは詩の解釈でその知識と理解を丁寧に示していました。しかし、幾人かの生徒は型通りの説明や言い換えをするだけで、抜粋箇所即ち独自の解釈を示していませんでした。このような場合は、質疑で作者の感情や考えを問うようにするとよいでしょう。

### 規準 B

大半の生徒はこの評価規準に合う一定レベルの力を示していました。生徒は詩を適切に論評する上で、作者が使用する言語、構成、文体の特徴を鑑賞する必要があります。そこで教師と生徒が作品をさらに詳細に検討すると、その力は向上するでしょう。到達度の高い生徒は、この練習の成果が明らかでした。こうした生徒は作者の用いた文体上の工夫、技法、そしてそれらが読者に与える効果に言及しています。また修辞法をただ指摘するだけでなく、その技法が作品の特定箇所に与える意味合いや主題との関わりもよく探究していました。

### 規準 C

生徒の多くはコメントリーをどのように構成するかをよく考えています。しかし、中にはコメントリーが5～6分で終わってしまう生徒もいました。これは生徒の知識と理解が十分でないためと思われるが、論評の組み立ての練習が足りないためでもあります。そのため詩に関する知識や理解は示せても、論評箇所と自分の考えを関連づける力を十分に示すことができていませんでした。また序論と本論との関わりにも注意すべきです。なぜなら序論は生徒の抜粋に対する総合的な見方を提示するからです。

序論では作者や作品の文学史的位置付け、時代背景を述べる生徒が多いですが、これらの知識は生徒が解説を始めるにあたって一定の安心感を与えることはあっても、コメントリーの到達度が必ずしも高くなるとは限りません。

### 規準 D

ディスカッションでは多くの生徒が作品の知識と理解をよく示していました。教師の問いかけも適切で、作品の鍵となる問題を幅広く取り上げていました。しかし、教師と生徒との文学的議論のレベルが高いものはまだ少数です。

### 規準 E

教師の問いかけは作品によく関連付けられており、したがって、生徒の多くは作品に対する自分の考えを示すことができていました。生徒が自分の力を発揮できるかは教師の問いかけによるため、まずはあらかじめ用意した設問で練習し、徐々に自然なディスカッションができるようにするとよいでしょう。

### 規準 F

生徒の多くは課題に適切な言葉で明瞭かつ簡潔に自分の考えを述べていました。しかしながら緊張のため論評を組み立てることができず、自分の力を十分に発揮できない生徒もいました。豊富な語彙とともに文学用語を駆使できる生徒もまだ少数です。

## 今後の指導に関する提案およびアドバイス

各行の言い換えや、型通りの説明で終わらないよう論評の組み立て方を工夫するように指導してください。論評では 2 分の質疑応答の時間を必ず残すように指導してください。また、試験官はコメントリーが 10 分を越えた場合、その箇所は評価しません。「考察を促す問い」は、1 問は知識と理解に関するもの、もう 1 問は作者の用いた技法に関するものにしてください。そうすることで、生徒の論評は評価規準に合うものとなるはずです。

詩の論評方法ですが、生徒ができるだけ定型にとらわれないように指導するとよいでしょう。

ディスカッションは自然な質疑応答であるべきですが、文学的に興味深い返答をどのように生徒から引き出すかにも留意する必要があります。

## Standard level internal assessment

### Component grade boundaries

<b>Grade:</b>	1	2	3	4	5	6	7
<b>Mark range:</b>	0 - 4	5 - 8	9 - 12	13 - 16	17 - 19	20 - 23	24 - 30

## 提出された成果物の特徴および適切さ

多くの学校は OCC の資料を参照し、その手順に則って個人口述コメントリーを行っていました。ほとんどの場合において、抜粋と「考察を促す問い(ガイディングクエスチョン)」は適切にスキャンされていましたが、抜粋に「考察を促す問い」が記載されていないこともありました。抜粋には必ず「考察を促す問い」も併記し、同一紙面に収めるようにしてください。

コメントリーの実施時間は 8 分以上にならないように注意してください。教師は質疑を 2 分する必要がありますが、実施時間が 10 分を越えた場合、試験官はその箇所の採点はしません。

「パート 2: 精読学習」の作品は PLA から選択されており、作品のジャンルも異なっていました。また作品は内容および技法を分析するのに適切なものでした。抜粋は詩歌が多く、著者は三好達治、高村光太郎、中原中也、松尾芭蕉などが取り上げられていました。物語・小説は遠藤周作、宮沢賢治、谷崎潤一郎などの作品、戯曲は木下順二の作品からでした。

サンプルの質はどれも全体的によかったです。そして 1/IARF のコメントは受験者の成果を評価規準に照らし合わせた適切なものでした。「考察を促す問い」も、数、質ともに適当でした。

教師は生徒が 10 分論評しない限り、終了後に質疑応答を行っていました。教師の質問は生徒の知識と理解をより明確にし、生徒が自分の考えを示す機会を与えていました。

抜粋はパート2の作品から選択されており、長さも適切でした。しかし、抜粋は20～30行が推奨されていることに気づいていない教師もいました。そこで、抜粋が長いために生徒が10分以上論評し、質疑ができないケースもありました。抜粋の長さを意識するためにも、試験問題1と同じく行に番号を振るとよいでしょう。

## 評価規準に基づく受験者の到達度

### 規準 A

生徒の多くは抜粋に対する適切な知識と理解を持ち、抜粋と作品全体との関連もよく意識していました。しかし幾人かの生徒は作品と作者についての一般的知識を述べるに止まり、抜粋箇所に対する深い理解を示していませんでした。また作品の要約や粗筋を述べるだけの生徒もいました。

詩の論評ですが、作者と語り手の違いに気をつけてください。この区別が意識されていない場合、論評が作者の自伝になりがちでした。規準Aでは生徒の独自の鑑賞と分析が求められています。したがって、生徒は、抜粋の細かな表現に自分がどう共感するかに目を向けられるようになるとういでしょう。

### 規準 B

生徒の多くは抜粋に用いられた構成、技法、文体などを指摘していました。しかし、ただ単に指摘するだけでなく、それらがどのような効果を上げているかを明らかにする必要があります。この点についてさらに論評できるようになるとよいでしょう。

### 規準 C

生徒の多くは論評をどのように構成するかを意識していました。しかし幾人かの論評は短く、意図が明確でありませんでした。例えば、「考察を促す問い」に答えるだけ、あるいは適切な箇所の引用によって裏づけられた理解が示されていないなどといったケースがありました。また、生徒は抜粋についての知識や理解を示すだけでなく、聞き手も意識しなければなりません。

序論と本論との繋がりも大切です。なぜなら序論は生徒の抜粋への総合的な見方を提示するからです。

生徒の多くが行を追って論評をしており、これは詩の場合に特に多く見られました。このアプローチは論評に少なくとも一定の構成を与え、特定箇所の分析を可能にする方法といえます。しかし、主題に焦点を当てたホリスティックなアプローチも試みるとよいでしょう。

### 規準 D

生徒の多くは滑舌のよい話し方をしていました。しかし、中には緊張のため、自分の力を十分に発揮できない生徒もいました。こうした生徒は語彙力が不足しているようです。また、文学用語を駆使できる生徒はまだ少数です。

## 今後の指導に関する提案およびアドバイス

個人口述コメントリーには 4 つの評価規準があり、生徒はこれらの内容を理解しておく必要があります。大事な点に抜粋と作品について独自の鑑賞を述べることがあります。そこで、教師は生徒と抜粋や重要な一節について討論し、作品の主題に焦点を当てたホリスティックなアプローチを試みてください。その際に生徒は自分の論評を自己採点してみるのもよいでしょう。

制限時間を越えて論評してしまう場合があるため、生徒が質疑応答の時間を 2 分残すよう意識させてください。

生徒が作者の選択した言語、構成、文体、技法の意味が認識できるようにしてください。

なお、生徒は語尾を「だ、である」にして話す必要はありません。

## HL/SL Higher level written assignment

### Component grade boundaries

<b>Grade:</b>	1	2	3	4	5	6	7
<b>Mark range:</b>	0 - 6	7 - 9	10 - 12	13 - 15	16 - 18	19 - 20	21 - 25

## 提出された成果物の特徴および適切さ

今回初めて記述課題を IB のサイトに直接アップロードすることになりましたが、それに関する事務的なミスが数多く見られました。まず、受験者に関する個人的な情報（学校名、氏名、受験番号等）は論文内に一切載せないというルールが、きちんと守られていませんでした。また、学んだ作品名や記述課題および振り返りの記述の字数等を記入する IB 指定のフォーム (1/LWA) には日本語で記入して構いませんが、日本語に対応しているフォームを使用しないと文字化けしてしまいます。OCC でしっかりと確認するようにしてください。

<a href="#">1/LWA Language A: literature – written assignment cover sheet (for Hebrew characters)</a>	
<a href="#">Language A: Literature school supported self-taught oral commentary questions (May and November 2015)</a>	
<a href="#">November 2016 - Forms and cover sheets</a>	
<a href="#">1/LWA Language A: literature – written assignment cover sheet (for Hindi characters)</a>	
<a href="#">Language A: Literature school supported self-taught oral commentary questions 2014</a>	
<a href="#">1/LWA Language A: literature – written assignment cover sheet (for Japanese characters)</a>	← このフォームを使用
<a href="#">May 2016 - eCoursework user guide (for candidates)</a>	
<a href="#">1/LWA Language A: literature – written assignment cover sheet (for Korean characters)</a>	

さらに、「振り返りの記述」が添付されていない例もありますので、アップロードの前に良く確認してください。

テーマの選択に関しては「教師の監督下での記述活動」を経て決定することになっていますので、概ね的が絞られていましたが、一部にはテーマが多少広すぎるものもありました。この場合結論がどうしても曖昧なものになりますので、相応しいテーマとなるように教師と受験者が良く話合うことが大切です。

「振り返りの記述」の役割はかなり浸透してきましたが、まだ一部に誤解が見られます。「振り返りの記述」では、「対話形式の口述活動」や「ジャーナル」(Self-taught の場合)を通して自分の考えがどのように発展したかを明確にする必要があります。「対話形式の口述活動」や「ジャーナル」のまとめや感想でもなければ、これから書いていく「記述課題」の紹介でもありません。

## 評価規準に基づく受験者の到達度

規準 A：「振り返りの記述」が何を目的としたものかということは、多くの受験者が理解しています。しかし一部には、目的を明確に把握しないで、ただ「対話形式の口述活動」や「ジャーナル」の結果を述べたものがありました。また、ここで重要なのは、活動を通して自己の考えがどのように「発展」したかを明瞭に示すことです。「変化」したと述べるだけでは不十分ですし、「発展」という語彙を使用していても、その内容を示していないものは高得点にはなりません。

規準 B：多くの受験者が作品に対する正確な知識を持っていて、内容もしっかりと把握しています。しかし、鋭い洞察力を示しているものは少数でした。作品に書かれていることを理解するだけでなく、自分の持っている知識や人生経験と照らし合わせて、内容を深く解釈したり、意味を問いかけていったりする姿勢が大切です。

規準 C：評価規準の中でも点差が激しいところです。選択したテーマが、必然的に作者のスタイルや技巧等を分析するものと問題ないのですが、そうではない場合、この規準を意識していないと、ほとんど分析が見られないケースがあります。もちろん、無理に比喻、韻、対句等の用語を使用していなくても最高点は取れます。要は作者の効果的な技巧について鋭い分析があれば良いのです。

規準 D：ほとんどの受験者はきちんと構成を考えて論じていました。ごく一部に、結論を明確に述べていないものがありました。また、テーマの分析とは関係なく、ただ作品の知識や解釈を述べているようなものもありましたが、これはよい構成とは言えません。論拠として、作品からの直接引用や間接引用が必要ですが、これらにはしっかりと「注」をつけてください。

規準 E：多くの受験者が標準以上のレベルです。しかし、同音異義語によるミス等が目立ちますので、仕上げた後に必ず再読して、ケアレスミスを減らしてください。

## 今後の指導に関する提案およびアドバイス

課題のテーマが相応しいものになるように、生徒としっかり相談してください。また、注の付け方や作品からの引用方法なども、きちんと指導してください。

どんなテーマでも、作者の工夫について意識しながら論じていけば、規準 C をクリアできますので、普段の授業や小論文の演習において、生徒が意識できるように心がけてください。

作品の知識だけではなく、行間を読み、作者の意図を考える深い学習ができるように、授業において生徒と議論する機会を増やしてください。

## Higher level paper one

### Component grade boundaries

<b>Grade:</b>	1	2	3	4	5	6	7
<b>Mark range:</b>	0 - 2	3 - 5	6 - 9	10 - 11	12 - 14	15 - 16	17 - 20

### 今回の試験で受験者にとって難しかった内容

作品全体の基本的な情報（いつ、誰が、どこにいて、どんなことを行っているのか）があやふやなまま解説文に取り掛かると思われる解答がいくつか見られました。課題文の適切な箇所への言及によって論を裏づけることなく、「不思議な雰囲気を作っている」「幻想的な世界観を持っている」などの表現のみでまとめ、それが規準 A の評価に影響した解答もありました。これは、散文、詩、いずれの課題についても見られました。

また、特徴的な表現や表現技法などを取り上げ、その部分についての説明まではできたものの、作品全体の解釈や主題にまでつなげることができなかつた、という残念な解答も見受けられました。規準 A および規準 B の評価に影響した点です。

一部ではありますが、ふさわしい日本語があるにもかかわらずカタカナ語を多用する解答もありました。あまりに多いと、これは規準 D に影響します。

### 今回の試験において受験者がよく準備できていたこと

ほとんどの解答が、解説文にふさわしいスタイル（文体）を用いており、言語学的確に選んでいました。また、冒頭でしっかりと解説文の方向性や方法を述べる構成の作り方が日頃から定着していると思われる解答が非常に多く、多くの受験者が万全に準備をして試験に臨んだことがうかがえました。表現技法について、幅広く知識を持ち、かつ名称やその効果も的確に説明できている解答も多くありました。

## 設問ごとの解答結果（強みや弱点）

非常に高い割合の受験者が詩を選びました。

詩を選んだ解答では、連ごとに解説を進め、最後に全体の主題をまとめる、という構成がしっかりできているものが多くありました。さらに、連ごとの語り手の状況から、作品の盛り上がりをつまみとしようとするものもありました。一方で、表現技法に注目するあまり、ほぼそれに終始してしまう解答も見受けられました。引用する表現技法も、同じものが繰り返されることもありました。

散文を選んだ解答では、語り手の心情に迫り着こうとする分析の姿勢がみられました。自然描写の仕方や文末表現など、細かい点を丁寧に上げていました。その一方で、抜粋部の前半の分析の丁寧さが後半まで続かなかった解答も多くありました。作品の盛り上がりや、語り手の心情の高まりなどを踏まえ、全体的な解説の流れを整えるとよかったです。

## 今後の指導に関する提案およびアドバイス

全体的な構成の立て方、特に書き出しの部分について、一定のスタイルがよい形で定着していると思われる解答が多くありましたが、これについては学校間の差が出ていました。もちろんマニュアルがあるわけではありませんが、授業で解説文にふさわしい構成の立て方を取り上げ、生徒個人のなかで定着するまで繰り返すことが必要でしょう。

構成でいうと、書き出しの形の定着がある一方で、解説文における結論部の重要性が今ひとつ認識されていないように感じられました。まず、簡潔にまとめて終わってしまうことなく、それなりの文字数を割くということ、そして、それまで取り上げた引用部を、きちんとまとめているということ、さらにいうと、抜粋部全体の主題につなげるために、抜粋部そのものから少し距離をおいて、概念的、哲学的なレベルにまで高めることができれば高得点につながるでしょう（命とは何か、自然と人間の関係、など）。これらも日々の授業の中で繰り返し経験を積んでいくことが必要でしょう。

その他、必ず試験に臨むまでに習慣づけておいて欲しいことは、用紙に書き始める前の構想です。引用部の書き出しからその取捨選択、結論につなげるまでの全体の流れなど、事前にある程度全体の形が見えてから用紙に書くように日頃の練習から習慣にしましょう。書き始めの丁寧さが後半部の盛り上がりまで続かなかった解答や、結論が近づいて急ぎ足になる解答がありましたが、事前に構想をしっかり練ることでそれは整えられるはずです。また、大幅な削除や置き換え、挿入などが行われ、ページをまたいで行ったり来たりしながら読まなければならない解答もありましたが、これについても構想が行われていれば読みにくくなるほどの訂正は必要なかったはずです。

漢字や表記については、致命的な間違いはごくわずかで、全体的によくできていました。この調子で、試験中に漢字でつまってしまうことがないように、日々の練習でしっかり手書きの経験を重ねておくとよいでしょう。辞書にあたる癖も必要ですが、辞書がないという試験の条件下でどれほど書けるか、といった訓練も必要かもしれません。

## Standard level paper one

### Component grade boundaries

<b>Grade:</b>	1	2	3	4	5	6	7
<b>Mark range:</b>	0 - 2	3 - 5	6 - 7	8 - 10	11 - 14	15 - 17	18 - 20

### 今回の試験で受験者にとって難しかった内容

散文、詩の内容は理解しているものの、論評を組み立てる練習が不足していると思われる答案が多くありました。抜粋文に現れる登場人物に関しての情報や状況設定について考察することなく、A、Bの設問を中心に書いた答案が多かったのが今回の試験の特徴でした。

また、去年より更に多数(20%)の受験者が設問 A と B を別々に解答しており、一つの論評としての一貫性にかけていました。

### 今回の試験において受験者がよく準備できていたこと

出題された散文および詩に対する理解に関しては、十分なレベルに達している答案もありました。

十分な学習と練習を積み重ねてきたことがうかがえる優れた答案がありました。作者の言葉遣い、構成、技法および文体に関する選択がどのような意味を形成しているかについて、優れた分析と認識が示されていました。

### 設問ごとの解答結果（強みや弱点）

60%の受験者が散文を選びました。この課題文は、詩の課題文に比べて受験者にとって理解しやすかったようです。しかし、筆者が使用した文体、特にかぎ括弧が用いられている表現と、かぎ括弧が用いられていない表現、「こころの中の声」や「葛藤」などに注意を払い、優れた分析をした受験者はごく少数でした。

詩の課題文においても、表面的な解釈にとどまった受験者が多く見られました。一方で、「みかん」「碁」「老人」が何を象徴しているのか、またこのような表現方法がどのような役割を果たしているのかについて説得力ある分析をした優れた答案もありました。

### 今後の指導に関する提案およびアドバイス

解説文を書くための基本的知識をつけるべく、教師は日常の授業において、その書き方を指導することが求められます。

散文の場合、試験に出題される課題文は、小説からの抜粋、随筆または評論からの抜粋など、さまざまなジャンルから出題されます。受験者がどのジャンルからの課題文でも書けるよう、過去に出題された課題文やその他の資料を使って、練習を繰り返すことが必要です。

詩の場合、作者の技法、特に比喩、隠喩、シンボルがどのような役割を果たしているかを見抜き、分析する方法を教えることが大切です。

## Higher level paper two

### Component grade boundaries

<b>Grade:</b>	1	2	3	4	5	6	7
<b>Mark range:</b>	0 – 4	5 – 8	9 – 12	13 – 15	16 – 19	20 – 22	23 – 25

### 今回の試験で受験者にとって難しかった内容

設問によっては、求められているものを明確に捉えることができなかった受験者がいました。設問は多少幅広く問われている場合もあるので、受験者がそれをどのように考えて明確化していくかが重要になってきます。この段階できちんと考えていないと、どう答えるべきか曖昧になり、結論も論理も鋭さに欠けてしまいます。

作者の文章表現上の特色を分析することも、難しい事の一つです。設問の意味をしっかりと捉えた上で、それに答えるために何をどのように分析するかプランを考える際に作者の技巧を意識することが大切です。事前に覚えてきて、それを書き並べるだけでは、設問との有機的な繋がりができません。

### 今回の試験において受験者がよく準備できていたこと

学んだ文学作品に対する理解や知識は安定していました。また、論文の構成もしっかりした答案が多くありました。

### 設問ごとの解答結果（強みや弱点）

設問 1：「省略」について問われていますが、ストーリーの省略だけではなく、会話の省略等種々の「省略」について論じられていたので、個性的な答案が多くありました。ただ、高得点を獲得するには、省略の例だけではなく、それがどのように表現されていて、どのような効果を生み、作者の意図は何であったのか、深い分析が必要となります。「省略」と主題が結びついていない答案が見られました。

設問 2：非常に多くの受験者がこの設問を選択しました。冒頭や結末の分析というのは、過去に何度も出題されていますので、比較的多くの受験者がよく準備をしてきたようです。問

われていることも明確ですので、ある程度のレベル以上の答案が多くありました。しかし、結末の分析をする前に、そこに至るまでのストーリーの解説に時間をかけすぎて、結末そのものの分析がおろそかになってしまった答案もありました。

設問 3：テンポの違う作品の例は明確に指摘されていました。ただ、その効果や作者の意図の分析が、受験者によって差がありました。一部には、無理に効果を考えて、説得力に乏しい答案も見られました。問われているのは、テンポの違いが「どのように作り上げられている」かということです、そこにもっと集中すべきでした。

設問 4～7：選択した受験者はいませんでした。

設問 8：2作品の比喩を上手く比較検討しています。しかし、作品からの適切な具体例を出すのが難しかったようです。

設問 9～10：選択した受験者はいませんでした。

設問 11：「時代背景」という明確な指示がありますので、比較的よくできていました。時代背景を理解するのに、物理的証拠のみならず、心理的な要素や経済的な要素もきちんと分析した、優れた答案もありました。

設問 12：扱った作品によっては「対立・葛藤」が非常に明確に表れているので、論じやすかったようです。表れている対立を描写するのはよくできていましたが、その効果をきちんと分析し、その分析に説得力を持たせるのに、苦勞していました。

## 今後の指導に関する提案およびアドバイス

文学作品をきちんと読み理解することは基本ですが、よい小論文を書くためには、一つの作品をあらゆる角度から考えてみるのが大切です。冒頭、結末、主人公、構成、時代背景、葛藤等種々の要素について考え、パート 3 の他の作品と比較してみるとよいでしょう。過去問を活用するのも良い方法です。

論文の書き方（原稿用紙の使い方や教育漢字なども含めて）を学ぶと共に、早い段階で実際に小論文を書く練習を始めるとよいでしょう。そして、担当の教師が採点して、改善点を指摘してあげるといった繰り返しが重要です。教師は評価規準を使用した採点に慣れるために、積極的にワークショップなどに参加して、自分のスキルを上げていくことも大切です。

## Standard level paper two

### Component grade boundaries

<b>Grade:</b>	1	2	3	4	5	6	7
<b>Mark range:</b>	0 - 4	5 - 8	9 - 11	12 - 14	15 - 17	18 - 20	21 - 25

## 今回の試験で受験者にとって難しかった内容

設問によっては、問われている内容を明確に把握していないまま答えを書こうとしている答案が見られました。何を問われているかを考えることは非常に重要です。もしそれが曖昧なままに答えを書き始めてしまうと、論全体が曖昧になり、結論も設問に沿ったものとなりません。したがって、全体的に点数が低くなってしまいます。

作者の文体の特色や工夫等を捉えることも、難しい要素の一つです。また、そういったものを分析していても、設問と上手く結びついていないと高得点にはなりません。文体の特色というのは、比喩や構成のみならず、効果的なものであればどんなものでも分析に値します。幅広く考えて分析して下さい。

小論文の基本を学んでいない受験者もいました。また、簡単な教育漢字が書けなかったり、作品名にきちんと括弧をつけていなかったり、というケースも見受けられました。こういった基本はきちんと押さえて欲しいと思います。

## 今回の試験において受験者がよく準備できていたこと

ほとんどの受験者が、学んだ文学作品についての正確な知識を持っています。また、設問に沿った文学作品の比較も良くできていました。

## 設問ごとの解答結果（強みや弱点）

設問 1：ここで問われているのは「省略」についての技法や効果です。ストーリーの省略、言葉の省略等種々の「省略」について論じてくれました。それぞれ個性があり興味深い答えが導き出されていましたが、会話文における言葉の省略等、小さな省略を扱ったものは、結論に苦しんだようです。また一部の受験者は、問題の意味をきちんと考えずに、レトリックであれば何でも分析して良いと勘違いしていました。ストーリーの要約のみになり、作者の工夫や主題に結びつけることのできなかつた場合もありました。

設問 2：非常に多くの受験者がこの設問を選択しました。冒頭や結末に関する設問は、過去にも多く出題されているので、十分に準備してきた者が多かったようです。その意味において、ほとんどがある一定以上のレベルに達していました。しかし、結末の解説の前に、ストーリー解説に時間を取られて、結末そのものについて深く分析できていない答案も一部に見られました。

設問 3：この設問に関しては、テンポの速さの違いについて「どのように作り上げられている」かが問われています。これをどのように解釈するかによって、答案が色々なタイプに分かれました。最も多かったのは、テンポの違いがどのような効果を生んでいて、またそれは作者のどのような意図に基づいたものであるかを論じた答案でした。速いテンポの作品と、遅いテンポの作品を比較できた論は、大体において説得力がありました。

設問 4～7：選択した受験者はいませんでした。

設問 8：作者の技巧や意図についてよく解説されていましたが、説得力のある具体例を出すのに苦労がありました。

設問 9～10：選択した受験者はいませんでした。

設問 11：2 作品を上手く比較し論じていました。分析の仕方が個性的な論も見られました。

設問 12：「対立・葛藤」について論じることが求められています。学んだ作品によっては、登場人物の対立や葛藤が明確に出ていて論じやすかったようです。その「効果」をどこまで鋭く分析できたかが、重要なポイントとなっていました。

## 今後の指導に関する提案およびアドバイス

論文を書くための基本として、原稿用紙の使い方や、教育漢字等はしっかりと学んで欲しいと思います。

文学作品そのものは大体においてよく学んでいるようですが、小論文において大切なのは、それらの作品をどのように引用しながら、明確に設問に答えていくかということです。結論が明瞭であり、論理的な答案となるように、過去問等を活用しながら練習を繰り返していくことが大切です。また、作品を学んだ後に、それを多角的な面から分析していくという練習も必要です。